

人・ひのきしん 生・記

「点訳」 その③



勉強会の受講者の質問に、一つひとつ丁寧に答える青池さん
(大阪教務支庁で)

六つの「点」 に刻むもの

「あ」と10年で目が見えなくなります」

「あ」 仕事中、視界にかすみがかかるような違和感を覚えて受診した青池清一(77歳・青華分教会梅町布教所長・大阪府守口市)は、医師の言葉にショックを受けた。昭和39年、29歳のときだった。

すぐに所属教会へ足を運び、「生涯変わらぬ心で、教会の御用に励まさせていただきます」と心を定めた。すると、次の検査で「失明の恐れはない」と告げられた。「親神様のお働きを実感するとともに、このことがきっかけで目が不自由な方の存在を、それとなく意識するようになった」

翌年に志願した修養科では、点訳の課外授業を受けた。そのつながりから、41年には「点字研究室」室員となるよう打診された。「ご恩返しので、少しでも自分にできることを」と快諾。以来、親里での点訳講習会や通信教育の講師を務める傍ら、地域の教友の要望に応え、教務支庁で「点訳勉強会」を開講した。

時を経て平成6年、還暦を前に体の異変に気づく。糖尿病だった。視力は見る見る衰え、翌年には失明に至った。「あと10年」と言われた日から、実に31年が経っていた。

「本当は10年で見えなくなるところを、親神様が20年も引き延ばしてくださったのでは……」。そう悟りがつくと、自然と感謝の思いがあふれた。

左目は完全失明したものの、その後の治療で、右目の矯正視力は0.01に。色の識別も難しい。しかし青池は、以前と変わることなく、点字研究室の務めに、勉強会にと走り回る。

点訳勉強会では、受講者の疑問や質問に、にこやかな表情を浮かべながら丁寧に答える青池の姿がある。

文章を読む際は、高倍率ルーペを手手に、1字ずつ目で追って読む。板書は、受講者のサポートを受けながら進めていく。

「点訳においても、目が見えなくなって初めて気づかされることが多い。本当の意味で、読み手のことを考えて御用に当たる大切さが分かったように思う。親神様・教祖がお使いくださる限りは、今後の活動を担うひのきしん者育成のお手伝いをさせていきたい」

点字を構成する「六つの点」に向けるまなざしには、力がみなぎっている。